

平成 30 年 8 月 10 日

あきる野市議会議長殿

会 派 名 明るい未来を創る会
代表者名 合川 哲夫



会派の（調査研究・研修）報告書

このことについて、下記のとおり実施したので報告します。

記

1 調査研究または 研修実施日	平成 30 年 7 月 11 日（水）・12 日（木）・ 7 月 13 日（金） 2 泊 3 日	
2 調査研究また は研修場所	7 月 11 日	北海道北斗市
	7 月 12 日	大崎市 デリシャスファーム株式会社 大崎市
	7 月 13 日	栗原市
3 調査研究事項 または研修名	北斗市	・ 合併 10 年を経た現在の状況と財政状況
	大崎市	・ デリシャスファーム（株） ・ 世界遺産「持続可能な水田農業を支える大崎耕土」 伝統的水管理システム
	栗原市	・ 移住・定住対策について ・ 地域おこし協力隊について
4 参加者指名 (5 名)	1. 清水 晃 2. 中村 のりひと 3. 奥秋 利郎 4. 合川 哲夫 5. 村木 英幸	
5 調査研究また は研修の概要 及び感想」	別紙のとおり (1 P ～ 7 P まで)	
6 その他		



1 日目

北斗市

1. 概要

人口 46,390人 過去4年間で毎年300~400人減少していく。
面積 397.44 km²

※ 市の経過

北海道の雄大な風景が広がる北の大地に、平成18年に上磯町と大野町が合併し、北海道で35番目の市が誕生した。

南に函館湾、東には函館市に隣接している関係で昭和の経済成長時にはベッドタウン化の人口増であったが現在では減少傾向である。

そういった状況の中で北海道新幹線が開通し、道内の最初の駅「新函館北斗駅」が整備され、東京まで4時間少々で行ける便利さは、将来の発展が期待される。



庁舎前での記念撮影

2. 視察事項と感想

視察事項として「合併10年を経た財政状況について」と説明に入る前に坂見秀幸議長の歓迎の挨拶があり、本題に入り種田宏財政課長が説明を行った。

感想

函館市に隣接しているが、前述のようにベッドタウン化の傾向がある。これは財政への圧迫がありメリットはない、人口減少も急速な減少は見られない。市内には太平洋セメントの大きな工場があるが、現在では国内の経済状況では出荷に陰りがあり、一時のような税収は期待できない。そんな状況下で、現状の財政状況は扶助費の割合が次第に増加して来ている。

合併当初交付税が54億2,000万円で5年後には16億円も増えたがその後は減少し平成28年では58億6,800万円と減少していく。このように交付税依存が財政運営に大きなウエイトを占め、確実に進んでいく減額を直視しなければならない。それはわが市でも同じことが言えると思った。

ここで北斗市は税収増の施策を立ち上げる必要がある、と思った。比較的平坦な市域、気候も道内では温暖な地域である。現在も農業のハウス栽培が盛んであるが、農地の集約化を図り企業の経営で収益をあげる農業の展開をはかる。第6次産業化も視野に入れ、売り上げを伸ばすことも十分に可能と思う。

一方目の前にある函館湾、ここでは育てる漁業、ホタテ、カキ、ホッキ等の貝類の養殖が可能ではないか、養殖により安定した漁獲量をあげ、そしてホッキ貝のブランド化を進め、増収を図る、安定した税収増が図られるのではないかと考えた。

2日目

宮城県大崎市にある農業法人「デリシャスファーム株式会社」

1. 会社概要

資本金 5,000万円

役員 代表取締役 今野文隆（68歳）

従業員 33人 内男性 6名

農業ハウス3か所 ・鹿島台農場 3,160坪 ・南郷農場 2,880坪 ・深谷農場 982坪

その他直売所、加工場 78坪 計7,100坪の施設。



社長の説明を受ける、視察風景

2. 講義と感想

新幹線古川駅から車で約40分、鹿島台農場を視察、仙台や松島までは1時間程度で行ってしまう大消費地があるが、生産してそのまま出荷する農業とは経営方針が全く違う。生産されたトマトは品質や見た目の悪いトマトは、安く販売するが、主に加工品に回し、ジュース、ジャム、ケチャップ、トマトソース、トマト豆乳、トマトビーフカレー等々、挙句にはトマトラーメンまで作り自社のカフェレストランで販売しており人気を博している。

リピーターとなるファームファンを作り、オーナー制度・メール会員の導入をはかり、イベントの開催や加工体験をして戴く。

イベントの開催は毎月の企画会議で内容を検討し、1月初売り、2月バレンタインデーと毎月欠かさず実施している。

2013年6月には、創業15周年「デリシャスまつり」を開催し3000名を超えるお客でにぎわった。

社内では女性の視点を生かした経営を実践し、女性従業員のために内外トイレ、シャワー室など女性が働きやすい職場環境を整え、女性の経営参加を薦め商談会に参加させ営業活動もさせて、役員、管理職として従事して戴き、積極的に女性を採用している。

社の基本理念、①土と作物を愛する心を大切にする。②常に消費者の求める商品づくりを目指す。③笑顔と活力に満ちた職場づくりを目指す。④若者にロマンを与える農業を創る。

この4つの理念をもとに、従来の農業から、企業的農業へ脱却をはかり、消費者のニーズにこたえ、あくまでも企業としての経営をはかり、生産性向上を図っていく姿勢に感銘を受けたが、加工商品の値段が高いが、これを求めていく消費者が居るのだなあ……と思った。

(以下の感想分は清水副議長記)

また、主として栽培している「デリシャストマト」と称するトマトのおいしさの秘密は、

1. こだわりの土づくり—— 時間をかけて成熟させた堆肥と有機肥料
2. 育苗も自社のオリジナル—— 毎日の水分管理
3. 節水栽培—— 苗を畑に植えた後、最も気を遣うのは水分管理、気温や湿度等天候をこまめにチェックしながら、徹底管理栽培。

デリシャストマトは春の収穫まで180日と言う通常の栽培例よりも長い時間をかけて栽培する。

高い栽培技術が必要なデリシャストマトの安定栽培、生産、加工を行い魅力ある農業を通して、地域貢献、後継者育成を実践していることに、深く感銘を受けた。

本市の農業振興の参考にしたい。

2日目

大崎市

1. 概要

※ 平成18年1市6町が合併し大崎市が誕生した。宮城県北西部に位置し西に山形・秋田両県に接し、北はわが市と姉妹都市の栗原市に接している。

こけしで有名な鳴子温泉の旧鳴子町も合併の1自治体である。

※ 人口 131,692人 平成30年4月1日現在（5年前の平成26年から3,580人も減少している）

※ 面積 796.76 km²



視察終了後議事堂内を見学

2. 視察事項と感想

※視察項目

世界遺産・持続可能な水田農業を支える「大崎耕土」の伝統的水管理システムについて

・講義

環境経済部世界農業遺産推進課 熊谷 裕樹課長

同上

高橋 直樹課長補佐

の両氏より講義と説明を受けた。

※ はじめに世界遺産認定の経緯

- ・ 2014 年 5 月 大崎地域世界農業遺産推進協議会設立
(大崎市、色麻町、加美町、涌谷町、美里町の 1 市 4 町)
面積 : 約 1,524 km² (152,381 ha)
うち農地 : 362 km² (36,190ha) 森林 : 837 km² (83,684ha)
 - ・ 2017 年 3 月 「世界農業遺産」認定申請の承認 (国内審査通過)
「日本農業遺産」認定
 - 9 月 農林水産省を通じて F A O (国連食糧農業機関) へ申請
 - 10 月 F A O 世界農業遺産科学助言グループ委員による現地調査
 - 12 月 F A O が大崎地域の世界農業遺産認定を公表
- 現在 20 カ国 50 地域が認定されている。日本には 11 地域がある。

※ 認定の概要

- ・ 農業システム名
持続可能な水田農業を支える「大崎耕土」の伝統的水管理システム
- ・ システムの概要
「やませ」による冷害や洪水、渇水の高リスクが高い厳しい自然条件を、「巧みな水管理」と土地利用で屈服し、湿地生態系と共生、伝統的な農文化と優れた農村景観を継承してきた水田農業システム、特に
 - ① 中世以降、脈々と受け継がれる巧みな水管理基盤。
 - ② 営農と暮らしを支えてきた伝統的な社会組織「契約講」による人々のつながり。
 - ③ 厳しい自然条件を屈服するための暮らしの知恵である屋敷林「居久根」と水田、水路がおりなす生物多様性を高く評価。
- ・ 水管理の重要な役割を果たす水路の構造体が 1274 年からの 1768 年の間に数多く築造され、水田農業に大きな役割を果たしている。



説明を受ける会派「未来」の面々

※ 感想

まとめると以上のような説明を受けたが、この地域に、760 組織もある伝統的な社会組織「契約講」、お互いを助け合う互助精神の強い絆が人々の生活の中に、脈々と受け継がれてきた。
この強い絆の精神があることで、共同、協働で行われる水管理が適切に行われてきた。

また「居久根」による自給的、自立的な暮らしが、生物多様性の自然循環が生まれこの「大崎耕土」をより豊饒な水田地帯として、未来に向かって生き継がれて行くことだろうと思うし、またある一面日本民族の農耕民族としての血が脈々として流れているのではないかと考えた。

3 日目

栗原市

1. 概要

我があきる野市とは友好姉妹都市提携を結んでおり、中学生の交流や産業祭への参加を戴き、賑わいの一翼を担っていただいている。

また災害時の救援業務などの提携も結ばれ、平成 20 年には岩手・宮城内陸地震に甚大な被害を受け、我が市から人材を派遣し、また救援物資を送るなどしている。

平成 28 年には、議会としての B C P（業務継続計画）の先進地として総務、環境建設両委員会で行政視察を行い温かいおもてなしを受けた。

※ 人 口 68,946 人（平成 30 年 3 月 31 日現在、昨年同時期より 1,113 人減少）

※ 面 積 804.97 km²（わが市の約 11 倍の広さをほこる。旧栗原郡 9 町 1 村が合併）



栗原市議会議場に

視察項目

① 栗原市の定住促進事業 講師 企画部市民協働課主査 中村 雅彦氏

栗原市の第 2 次総合計画では昭和 55 年の 95,801 人、35 年後の平成 27 年には 69,906 人で 25,900 人弱の人口減少が進んだ。

そこで、

ア、子育て、教育環境の充実。

イ、雇用機会の創出などで移住・定住促進施策の取り組みで人口減少を抑制する策をとる。それでも市外に転出する方が多い「社会減」が続いている。また生まれる子供よりも死亡する方が多い「自然減」も続いている。

栗原市では平成 20 年より東京で「ふるさと回帰支援センター」を開設し I J U ターンの流れを調査した結果、来訪者の内 20 代から 60 代まで全体の 70% を占める結果が出た。

その年代の中で I ターンを考えている人が 20 代から 60 代まで平均 60% 以上いる現状に、手ごたえを感じたが、地域となると山梨県、長野県に首位を奪われていく現状がある。

そこであらゆる、定住に関する取り組みを模索し、定住戦略室を設置し 6 つの事業を立

ち上げた。

- ※、空き家活用促進事業
- ※、移住定住促進事業
- ※、出会いサポート事業
- ※、移住定住情報発信事業
- ※、移住定住総合支援事業
- ※、地域運営組織の支援事業

この事業を実践していくと次第に成果が顕れてきた。ここでは具体的成果については紙面の都合上記述をさけますが、移住者と事業のコラボが生まれ、地域住民にも受け入れられるようになった。

② 栗原市地域おこし協力隊事業 講師 企画部市民協働課課長 佐々木 章 氏

地域おこし協力隊制度は都市地域から過疎地域へ人材を誘致し、地域資源の新たな発見や新しい感性で地域の活性化を図り、自治体職員だけでは取り組みにくい業務分野にも活動を拡げながら、地域力の維持及び担い手となる人材を確保するとともに、地域への定住、定着を図ることを目的とするもので、市が都市部の人材を協力隊員として委嘱し、おおむね3年間の支援を行う。

栗原市では4つの事業を展開し、9名に委嘱している。その内訳は以下の通り。

- | | |
|---------------------------|----|
| ※、くりこま山麓ジオパーク推進業務 | 4名 |
| ※、「くりでん」に関する業務 | 2名 |
| ※、花山地区小さな拠点づくり推進 | 2名 |
| ※、栗駒地区「六日町通り商店街シャッター開ける人」 | 1名 |

の4分野わたり、平成30年7月までに9名に委嘱している。

①隊員1名あたり400万円(特別交付税対象)この金額を超える場合は市負担となる。

②企業支援補助金100万円を財政支援した。

③「栗原市地域おこし協力隊総合支援事業」と称して市内に経済的、精神的に安定した定住ができるように、定住や起業等に向けた準備活動、情報提供等支援する事業で、任期3年で終了、延長も可能である。

まず、計画書の作成と、計画の実施。その計画書に基づく研修会の実施。支援の発表会の実施などで定住促進を図る活動の大きな要素となっている。

この地域おこし協力隊は、その隊員の数、平成21年は89名でしたが29年には4,830名、団体数31から997団体と膨れ上がった。うち60%の人が同じ地域に定住している。

女性の隊員が40%を超え、20歳代から30歳代の隊員が70%以上で、華やかで活気のある協力隊がそれぞれの地域で、活動している。

③感想

一言で言えば攻めているなと思いました。

「ビックリはら」<http://bikkurihara.com>

当市ではまだここまでやれていません。それは、当市の人口動態から、まだそこまで大きな課題として捉えていないとも言えます。

もちろん当たり前前に定住促進のために子育て環境の充実を図っています。

どこの自治体もやっているように当市でも実践しています。お隣の檜原村では人口減少は著しいのでもっと攻めています。攻めることによって檜原村の魅力が際立って来ます。

同じように栗原市のこの面白い取り組みは攻めてなければ出来ません。横並びからいち早く脱すること。それは単に過当競争の中での横並びから脱する形でより多くの財源を使うのではなく、アイデアで勝負している栗原市がそこにありました。当市もまだ今の状態だからこそ攻めるべきだなと、姉妹都市の試みを伺いながら感じました。

中村のりひと記



視察風景

終わり